テクノエイド（上級）研修会

優秀賞

ベッド上患者のスライディングボード活用の事例

佐久総合病院
小海分院　医療療養型病棟
吉岡 千恵美

施設概要

- 部署　　：小海分院　医療療養型病棟　病床数（49床）
- スタッフ　　：看護師14名　　看護補助者(介護福祉士)13名
- 関係スタッフ：医師9名、リハビリスタッフ19名
  医療ソーシャルワーカー２名、管理栄養士１名
- 特徴　　：高齢者の尊厳を支え、安全で安心して生活できる環境を保障しながら、小海を含める南部5ヶ町村の医療と関連施設が連携を密に行い、つなぐ看護介護の実践により注力している。

事例概要と課題

対象者：左半身麻痺　麻痺側は拘縮が強く、健側側の筋緊張高い

移動：全介助（フレックスボードを利用し、ストレッチャーへ移乗）

- フレックスボードでの移乗後、患者より左腕の痛みの訴えがあり、移乗の際に左腕を引っ張ってしまった為に痛みが生じた可能性が考えられた。
- これまでにも、患者を支える位置まで手が届かず、服や腕、足を引っ張ったりとする場面が多く見られた。

↓

- フレックスボードの正しい手技方法が部署内で共有出来ていない。
- 患者に合った、安全な移乗方法が検討されていない。

課題に対する対策

再度、用具の正しい使用方法を学び
個々に合った移乗方法の統一を図る。

1. リハビリスタッフよりフレックスボード・リフト活用時の手技方法を習得。
2. 個々に合った移乗方法が行われているかを確認し、統一したケアをチームに周知。
3. 関係スタッフへ伝達講習を実施。

対策実施後の結果

- 福祉用具活用時の使用方法を伝達講習することで、スタッフ全体が移乗時に安全を意識することができ、同様のインシデント事例が無くなった。
- フレックスボードの活用は、移乗時のベッドの高さや角度、患者を支える位置、スピードを意識して実践した結果、患者からは「今日は怖くなかった」「毎回こうしてほしい」との声が聞かれた。
- 入院当初、ストレッチャー移動をしていた患者に対し、筋力・耐久性が向上したため、車椅子乗車を開始したが、移乗の際に眩暈、嘔気が出現した。リフトによる移乗に変更した結果、眩暈・嘔気は減少、本人の負担も減り、在宅でも利用する方向で調整できた。
- 個々に合った移乗方法の検討により、患者・介助者双方の身体的負担軽減、安心へと繋がり、ADL・QOLの向上に繋がった。また、在宅を見据えた取り組みにより、双方に優しいケアが提供出来ていると実感できた。